



TITLE:

コメント

AUTHOR(S):

川喜田, 敦子; 石川, 初; 深田, 晃司

CITATION:

川喜田, 敦子 ...[et al]. コメント. CIAS discussion paper No.38 : 世界のエスキス --地域のカタチを読み解き、地域像を描き出す 2014, 38: 37-41

ISSUE DATE:

2014-03

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/228599>

RIGHT:

© Center for Integrated Area Studies (CIAS), Kyoto University

コメント及び総合討論

当日は、5人の発表の後に、3人のコメンテーターからコメントを頂き、会場参加者も交えてのディスカッションを行った。以下はその際の記録であり、コメント発表順に掲載した。なお司会は地域研の西芳実氏が行い、最後に地域研副センター長・原正一郎氏によって締めくくられた。

■ コメント

川喜田敦子（中央大学、ドイツ現代史・地域研究）

今、ご紹介いただきました中央大学の川喜田です。

私は、本発表会の準備作業を拝見したことがあります。関係者全員がそろって、報告一つ一つについてそれぞれ1時間近くかけて討論するという会でした。私はそれに1回参加しただけですが、内部ではその作業を5、6回はなさったと聞いております。つまり、個々のご報告はとても面白くて、それぞれについて1時間でも2時間でも議論できるのです。ところが、全部まとめて全体的なコメントをつけるようにと言われますと、個々の報告から議論できであろう数々の面白い展開の可能性をすべて刈り込んで、たとえば地域研究の方法論というような、非常に大味な議論にとどまらざるを得ません。それがとても残念であるということをもまずは申し上げたうえで、やや雑駁になりますが、感想を申し上げていきたいと思います。

今日のアプローチの特徴は、地域像を描く手がかかりとして、——言語ではなく——モノとカタチから入るということでした。その際、モノを通して地域像をイメージしたうえでそれを言語に翻訳するという方向性と、報告者が地域に関して持っている豊富な文字情報・言語情報を駆使してモノを解説していくという方向性の二つがあったと思います。そのどちらの方向性に近くなるかは分野的な広がりとは重なっていて——すなわち、自然科学・工学系は前者、人文社会科学系は後者に近くなるという意味で——今日の報告者が主として依拠される方法論に対応しているように思いながら報告をうかがっておりました。

私自身は人文系ですのでそれに近いご報告への感想が中心となりますが、「モノを読み解く」ことをテーマとして掲げるそれぞれのご報告についてまず印象的だったのは、実はむしろ、その背後に

圧倒的な量の文字情報・言語情報の読み解きの蓄積があると思われたことでした。それがあからこそ、非言語的な資料であっても、それを読み解き、解説することができるのでしょうか。非文字資料を読み解くために動員される、文字情報も含めた豊富な知識には素直に感嘆いたしました。ですが他方で、せっかく「モノを読み解く」と言うからには、文字情報・言語情報からだけでは実現できないような分析が可能になる、しかもそれによってその地域をよりよく理解できるようになる、という展開を期待してしまう聴衆としての私もいるわけです。

その意味で面白かったのは、エスキスという今日のキーワードと強い関連を持つ「ずれ」という問題です。谷川報告や、最後の村上報告などはその点で強く印象に残りました。植民地における支配・非支配関係、ポスト紛争後の国民統合への要請などの支配的なディスコースや言語化された時代精神と、個々の人間のこころ、営み、社会的現実の間のずれを、建造物や人間が作るものの形や位置が雄弁に語るのだ、という話として私はこれらの報告をうかがいました。人間社会における認識は言語を媒介にして広まるわけですが、認識や言説が現実と異なるときに、非言語的な素材でもってそのずれを衝くことができるのだという、「モノを読み解く」ことのもつ可能性を示す非常に示唆的な話だったと思っています。

もう一つ、ずれというキーワードとの関係で、地域研究者として身につまされたことがあります。今回のご報告のなかで、地域を理解するための方法、ないし、その素材として使われていたモノが、同時に、地域を記述して伝えていくための難しさを象徴しているようにも思われたことです。

この難しさには二つの側面があります。一つは時間に関係する問題です。柳澤報告で地域区分図というものが出てきました。その際、報告後の質疑応答で、区分図は静的なものではなく、あくまでもその近似値としてしか存在しないのだとおっしゃっていたことは非常に印象に残りました。その近似値が、許される近似値であるのか、それとも許されない齟齬にすでになっているのかという区別をとりあえず度外視して極論するならば、たとえば古い図というものは、現実ではなくなって

しまった情報をあたかも現実であるかのように人間が認識してしまう、すなわち現実とずれた認識を固定化する機能を持ってしまうのだ、と考えられます。この問題は、ある時点で地域を描き出した瞬間に、そのあとに起こる変化を反映していないものとして、現実から乖離した像が固定化されてしまうという、われわれ人文系の地域研究者が抱える問題ともパラレルであろうかと思いました。

もう一つの難しい点としては、描かれたものは必ず現実からずれてしまうという、描くという行為が内包する根本的な問題があります。たとえば山本報告では映画のシーン、福田報告では画像がたくさん出てきましたが、そうしたものは、意識的であるか無意識的であるかを問わず、避けることのできないデフォルメやゆがみを含んでいます。しかも、強い力をもってそれを広めていくことによって、クリシェ、要するに固定観念のようなものを成立させていきます。当然、製作者の意図と受け手の解釈の間にも避けがたくずれが含まれていると思います。山本報告は、この問題を、映画製作者であるところのヤスミン監督が、意図的に現実とずれたものを描くという角度から議論されたわけです。これは、われわれ地域研究者が、対象地域を取り上げる際のポイントも意識的、戦略的なものであるということ、その結果出てくるものはやはり一つのデフォルメであるという問題を連想させます。さらに言えば、好むと好まざるとにかかわらず、複雑な現実の一局面を切り取ってくることによって生じるデフォルメや、それに起因するイメージの固定化は、突き詰めていくと、たとえば「富士山と芸者」のような日本像、「ビールとソーセージ」といったドイツ像のように、極めて象徴的に何かを表しているが現実からは最も遠いような、そうした地域像の成立に場合によっ

ては加担してしまいかねない危険もはらんでいるということです。

われわれ地域研究者の課題とは、その地域を理解することであると同時に、それを描き出して伝えることでもあります。理解すること自体もすでに難しいのですが、描き伝えるというところにも特有の難しさがあります。その双方に向かい合っていかなければならないのだということを、改めて強く意識させられたワークショップでした。

石川初（(株)ランドスケープデザイン ランドスケープアーキテクト）：

私は研究者ではなくて、ランドスケープデザインという外部空間の設計やデザインを専門にしております。地域研究という観点から拝見していたわけではありませんが、それぞれのご報告を、非常に興味深く、印象的に拝聴いたしました。エスキスという言葉が特に印象的でした。私自身があまり地域研究の雰囲気や技法を、まだよくのみ込めていないかもしれませんが、エスキスという言葉で、ある土地やその文化をスタディするという観点や切り口もあったのかと、最初にタイトルを聞いたときに思いました。そして今日のご報告を聞きながら、これはさえたキーワードだなと、強く、ずっと感じていました。われわれのように、ものを設計する仕事でエスキスといえば、自分のアイデアのようなものを描いたり、模型にしたりすることで、外部化して、形にすることから始まります。そして改めてそれを、他人の目で読み直すといいますが、その由来を一回忘れてもう一回見直して、新しい解釈を加えて改良し、さらに異なる形へと変化・発展させていく、そういう繰り返しのことをエスキスと呼んでいます。その過程で、外部化されて見えてくるものを、いろいろ



発表者及びコメンテーター

な側面から解釈し直していくことに、グループで設計していくような行為があるのです。まさに今日のそれぞれのご報告から、「あ、エスキスってこういうことなのだな」と思いました。特に、これまでの由来から、このような形が表れているという痕跡として読み取るだけではなく、それをこれからどうなるだろうという、より広がった時間軸のなかに置いてみることによって、今見えているものを動的にとらえ直すといえますか、対象をスタティックなものではなく、動的な状態のものであるととらえ直すということが、非常に重要だと感じた次第です。

仕事柄、図面や地図になっているものに非常に印象を受けました。それぞれ面白かったのですが、強烈な印象を受けたのは、ソウルの建造物や都市のカタチが重なっていくプロセスや、紅河のデルタの自然環境のレイヤーと、人のレイヤーが重なっていくことで、地域図のようなものが出来上がっていくという、そのプロセスです。特に、たとえばソウルに関して言えば、出てきた形そのものに意味が宿ってしまうということがあるのではないかという気がします。ドームという形は、おそらくそれまでソウルも、日本も持っていなかったのではないかと思います。ドームが円形をなしていることで、蝶番的な役割を呼び込んだというような、形が召喚した機能というか、ツールとしての強さのようなものがあるのではないかと、拝見していて思いました。それから地域区分図は、地図を書くときの地図師の世界観のようなものが強く反映されるということを、拝見して思いました。今、描かれていく地図そのものが、近い将来は、それそのものがその地域を解釈したまなごしの痕跡のように読み替えられていくような、そういった歴史をたどっていくのだろう、そういった読み方もできるのかな、と思いました。いろいろ思うところはありますが、一応この二つは特に印象に残った点です。

西芳実（地域研）：

3人目のコメンテーターは映画監督の深田晃司さんです。今日はビデオレターでコメントをお預かりしています。

深田晃司（映画監督）：

深田と申します。最初に、せっかくワークショップにお招きして頂きながら、参加できなかったことをお詫び申し上げます。今、私はベラルーシという国にいます。『歓待』という私の昔の作品を上

映するためです。生まれて初めて、私は旧ソ連系の国に足を踏み入れました。おそらく、多くの日本人の方もそうだと思いますが、私にとってここは、チェルノブイリ最大の被害国という以上の印象は、今回、初めて足を踏み入れるまではありませんでした。しかし、当たり前と言え、当たり前前に尽きる話ですが、実際、この地について人と話してみて、そういった一面的なイメージでは語りきれない豊かな歴史や文化、個性を持った国だということを知りました。そして、昼はベラルーシやミンスクを巡り、夜はホテルで谷川先生から送っていただいた、今回のワークショップのリハーサル映像を見続けるにつけ、ほんとに単純な連想なのですが、地域研究者の皆様は、容易にはいろんな国に旅することのできない私たちのような一般人に代わって、様々な国へ飛び、世界のイメージを補正すること、いわば、第一印象や、一面的なイメージの補正を請け負ってくれている人たちなのかなと感じました。同時に、私は映画・映像というものは、異文化と異文化が触れ合うための最も強力なツールの一つだと考えています。私がベラルーシに対して一面的なイメージしか持っていなかったのは、ひとえに、私がこれまでベラルーシ人がベラルーシで撮った映画を1本も見ることがなかったことも原因の一つだろうと考えています。しみじみ、これから国際化が進む現代社会において、映画・映像の果たす役割はまだまだ大きいと感じました。

まず、全体の感想から申し上げます。あくまでも私がリハーサルをビデオで拝見した上での全体の感想になりますが、どの発表も大変刺激的で、わくわくしながら拝見させていただきました。本当に私の知らない情報ばかりで、勉強にもなりました。私は昔、大学で歴史をかじっていた人間なのですが、そのときから自分にとって大きな問題になっていることが、客観的な歴史とは何か、歴史家は客観的に正確な歴史を叙述できるのかということでした。今回の皆様の発表を聞いて、やはり、いわゆる世界というものは、主観と主観のパッチワークであって、そこには大小さまざまなずれがある。そのずれを顕在化し、指摘してくれる存在として、地域研究、あるいは地域研究者の言葉は必要不可欠なのだと思います。谷川先生の建築の話も、柳澤先生の地図の話も、おそらく普通に韓国に暮らしていたり、また、地図を眺めていたりしても、見落としてしまうであろうずれを発見させてくれる、つまり、世界の見方に変容をもたらしてくれる貴重な分析だと思います。本当は、

お一人お一人に質問したいことも山ほどあるのですが、今回は時間も限られているということで、私の専門分野に引き寄せた限定的な言及になることをお詫びします。

まず、山本先生のヤスミン・アフマド監督の話を聞きながら、しみじみと、映画とは客観的な記録とは程遠い表現だなと感じました。最初に、映画は異文化を知るための強力なツールと言いましたが、一方で、ヤスミン監督がこうあってほしいという理想の未来のマレーシア像を映画に投影させたように、映画は現実をゆがめて描き、そのイメージを拡散していきます。日本では残念ながら、メディア・リテラシーの教育が不十分で、ドキュメンタリー映画は現実を正確に映すものだという牧歌的な幻想が多く残っていますが、実際はそのようなことはなく、同じ場所にカメラマンが立っていても、カメラを右に向けるか左に向けるかで、映像が観客に与える印象は大きく変わっていきます。ヤスミンが映画に盛り込む理想は、いわば、かくあってほしい未来を、現実には先立つ形で、映画で実現させてしまうという、作家として踏み込んだ、勇気ある表現だと思います。しかし、一方で思い出すのは、アメリカ映画での黒人の扱いについての話で、黒人の上司・管理職というものが頻繁に登場し、たとえばモーガン・フリーマンという俳優が、代表的な存在として人気を集めています。それは、いわば人種差別への配慮から、バランスに気を遣いながら、プロデューサーなどが、俳優・配役を決めているのだと思います。一方で、その比率が、現実には即しておらず、スクリーンのなかに、あたかも人種差別のない世界が実現しているかのような印象を与え、不満をそらすガス抜きになってしまい、いわば人種差別を隠ぺいするプロパガンダになっているのではないか、という指摘を聞いたことがあります。もう一つ例を挙げると、チャップリンの映画に『独裁者』という傑作がありますが、これは本当に面白い映画です。チャップリンが切実な思いと覚悟を込めてこの映画を製作したことは疑いないと思いますが、一步引いた視点では、この映画がヒトラーを笑いの対象として茶化したことで、その後のホロコーストに至る、ナチスの暴走から世間の目をそらしてしまい、矮小化してしまったのではないか、という声もあります。実際、チャップリン自身が、映画製作当時、ホロコーストのことはまだ知らず、知っていたらこの映画は製作できなかったかもしれないと語っていると聞いた事があります。福田先生の発表にあった当時のニュースフィルムを見

て、それらはプロパガンダを目的として作られた映像でしたが、やはり作り手の一人としては、そのプロパガンダのニュース映像とチャップリンが真摯な怒りを持って作った映画としての傑作である『独裁者』と、どれほどの差異があるのだろうと悩んでしまいます。つまり、私自身の撮るものも、社会のなかでどのような位置づけで受容されていくかということは、作り手にはコントロールしきれないことで、あるいはそれは不可能なことです。たぶん、現代のいわゆる表現者というものの一私に引き寄せて言えば映像の作り手は、常にそういった、自分自身が社会にとって影響力を持っていることを自覚しなければいけないのだと思います。誤解があるといけませんが、私自身は、だから客観的に正確な映画を作らなくてはいけないと言いたいのではなく、客観的に撮るなんてことはそもそも不可能だからこそ、映画は面白いのだし、作り手は自分のなかでの倫理的な価値観の基準を持っていてほしいと願っています。それで初めて、いわば世界のエスキス—これは本当に素敵な言葉だと思いますが、世界に対する主観と主観のパッチワークと、そのすり合わせに、表現者として主体的に参加することができるのではないかと思います。

次に、村上先生のパチャママの夢と涙のエピソードについてですが、これは本当に他人事とは思えず、ぞっとしました。ぜひ聞きたかったのは、このオランダの美術家の方が、モニュメントの設計に呼ばれた経緯です。確かに村上先生の解説を聞き、写真を見ると、設置する場所、地域にしてもデザインにしても、もう少し地元のコンテクストに溶け込むようなやり方があったのではないかと思います。しかしやはり作り手の一人として、そのオランダのアーティストの方に同情したい気持ちも多少あります。確かにアンデスの文化になじまない西洋的なモニュメントがそこにこつぜんと現れた違和感は、たぶん現地の方にとってものすごいと思いますが、一方で、オランダの方がそれを作るに至る、そういうデザインを選ぶに至る二つの文脈があったのではないのでしょうか。具体的にいえば、そのオランダ人の作家が、西洋社会で育んできた価値観、そして、そこから生まれてきた作家個人、作家自身の作家性、この両方を文脈として考えないといけないと思います。作家として、どこかの団体から依頼が来て、その仕事を引き受けて、自分の署名をそこに残す以上、彼女自身のアーティストとしての文脈を無視するわけにはいかなかっただろうと思います。結局作

家は、何にでもなれるのかということ、そんなことはまったくなく、もしかしたら彼女にしても、その実質的にはアンデス的なデザインを模倣し、生かすだけのテクニックはあったのかもしれませんが、彼女はそれをせずに、自分の文脈のなかで作品を制作した。それは、もしかしたらその作家としては誠実といえれば誠実な態度だったのかもしれないなあと思います。そうした意味では、そもそもの失敗は、彼女がこの仕事を引き受けた選択自体にあったのかもしれませんが、私自身も、地方のコミュニティに入って撮影することがときどきあるので、大変身につまされる話だと思いました。作家が、ある種のプロジェクトに関わる、ある地域に入っていったって何か作品を作ること自体が、ものすごくその地域の文脈と、あるいはその作家自身の抱えている、どうしても逃げられない文脈とのせめぎあいと直面してしまうのだなあということも、村上先生の話から感じました。

今回ベラルーシに来て、いくつか雑誌や新聞のインタビューを受けました。その一つは、ストレートに原発に関するものでした。ベラルーシでは、ご存じの方も多いと思いますが、今、新しい原発が建築中です。しかしベラルーシは、ヨーロッパ最後の独裁国家といわれるぐらい、大統領が強い政治権力を握っている国で、原発増設についてもほとんど報道に上がらず、議論にもなりません。もちろん地元の方にも、福島のこともあり、建設に疑問を持っている人がいても、それを積極的に表明する人はあまりいないし、少なくともメディアの上では、まったくゼロだということです。それにまだ、街の真ん中に、KGB、秘密警察本部の立派な建物があって、結構びっくりさせられました。KGBも普通に活動しているので、うかつなことは、本当に危険で言うことができません。だからこそ、外国人である日本人の口を通して、原発反対の言葉を引き出そう、引き出してやるという、メディアの意地のようなものを、原発について私に尋ねてきた白髪の老いた女性記者からインタビューを受けながら感じました。いわゆる国際協力や、あるいは地域研究を専門にしている方とこうやってお話をしていると、外国人が別の土地、いわば自分の国以外の土地を研究する意味は何だろうと思うこともあります。それは、外国人だからこそ見えるもの、その国の人が当たり前すぎて見落としていることや、外国人だからこそ、空気を読まず吐ける「暴言」みたいなものもあるのかなあと思いました。皆さんが、別に各国で暴言を吐いているという意味ではないのですが。今回、

原発に関する取材などを受けるなかで、そう感じました。長くなりましたが、この辺でしめたいと思います。ありがとうございました。

■ 総合討論

柳澤雅之（地域研）：

発表後の質疑応答で、違う人が作ったら、違う地域区分図ができるのかという質問を頂きました。その時に、地域区分図は、人間が利用する生態環境のもっとも基盤となる図であり、基本的には誰が作成しても同じものができるはずだと答えました。しかし、少し説明不足だったと思います。そのことが当てはまるのは、東南アジアだからです。ほかの方からも質問がありましたが、生態基盤そのものが社会や文化に影響する程度は地域によって違います。発表で紹介した高谷先生が『世界単位論』の中で、世界が単位に分かれていると書かれ、その基盤に、あたかも生態環境があるかのような印象を多くの方が持っているかもしれませんが、世界が単位に分かれる根拠は、全然生態に関係ない要因がたくさん出てきます。たとえば中国では、思想が中華を一つの単位としてまとめていると書かれています。このことが示しているのは、高谷先生が中国を見たときには、中国を生態では全然説明できなかったということです。中国が歴史的に形成されるプロセスが、生態環境とは全然生態とは違う原因によって引き起こされており、その要因を、思想だということにして、ずいぶん批判を受けることになりました。これは一つの例ですが、生態基盤というのは、人の歴史という短い時間と比べると、非常に変化が大きく、基盤にはなっているが、それが人の社会や、歴史という短い時間に起きていることをどの程度反映するかということに関しては、全然地域によって違います。ですからやはり、地域を限定して答える必要があったと思います。

谷川竜一（地域研）：

コメントーターの三方からいただいたコメントはとてもつながって聞こえ、非常に共感することが多くありました。特に、石川さんがおっしゃった、エスキスということに関してのとらえ方は、私もそのようにとらえてくださって大変ありがたかったです。頂いたコメントの中で、私自身学ばせてもらったと思うことを先に述べておきたいのですが、エスキスという作業に関するとらえかたです。自分が案を出した後、誰かに意見をもらってそれ